

汶川地震後のチャン族研究（1）

松岡 正子

中国四川省西北部を震源とする汶川大地震（2008年5月12日）が発生してほぼ5年が経過した。中国政府は、「三年基本恢復、五年發展振興、十年全面小康」（3年で復旧、5年で發展振興、10年で全面的にゆとりのある生活へ）のスローガンを掲げて復興政策を推進し、チャン文化の復興についても、ユネスコの「非物質文化遺産保護条約」に基づく民族文化遺産の保護をすすめた。またチャン族研究に対しても巨額のプロジェクト基金を準備して奨励した。その結果、汶川地震後、チャン族研究はこれまでにないほどの活況を呈し、いくつかの重要な成果が生まれた。小稿では、このうち文化人類学を中心とした分野のなかで主要な成果数点をとりあげ、その内容と問題点を検討する。

1. 汶川地震後のチャン族研究の動向

中国四川省西南の山間部に居住するチャン族は、2008年5月12日の汶川大地震で総人口の約30%を失い、多くの建造物が倒壊するなど甚大な被害をうけた。中央政府は、チャン族に対してインフラの整備、家屋や街の復旧復興などのハード面に巨額の資金を投入しただけでなく、チャン文化の復興に対しても様々な支援を実施した。また地元政府は、中央政府の指導のもとチャン族の伝統文化の保持と復興を目標に掲げ、それらを観光資源とする観光開発の奨励によって地元の經濟發展に結びつけようとした¹。

ところで中国における少数民族研究は、チベット族のように政治的理由などで多くの内外の研究者が注目する国際的かつ全国的な研究を除けば、

1 被災地の観光開発は、地方政府の主導のもと、主に民族旅遊（チャン族とチベット族の民族文化）と黒色旅遊（被災現場參觀等）に、自然景観を楽しむ生態旅遊を加えた形で進められている。前者を代表するのが北川羌族自治県吉娜羌寨、汶川県水磨寨などで、後者には北川県旧鼎城（被災時のまま記念公園として整備されている）、汶川県映秀鎮跡がある。

それぞれの地域の民族研究所や地元の大学を中心とした地域性の強い研究であることが多い。チャン族に関する研究も例外ではなく、中華人民共和国成立後は地元の四川省民族研究所や西南民族大学、阿壩師範学院およびチャン族居住区の各県の文化館を中心とした研究が進められてきた²。しかし2012.5.12の汶川大地震後、中央政府は地震後の羌文化の保護と復興を国家的な文化政策の一つとしてとりあげ、多くの資金を投入した。

この背景には、21世紀にはいって中国政府が文化大革命時に徹底的に否定した伝統的な「中華文化」を「中華民族の優秀な文化遺産」として「中華人民共和国文物保護法」に明記し、中華文化の復興を柱に文化政策を大きく転換させようとしていたことがある³。中国政府は、2003年にユネスコからだされた「非物質文化遺産保護条約」を批准し（2004年）、2005年3月「関与加強我国非物質文化遺産保護工作的意見」と同年12月「関与加強文化遺産保護的通知」を發布して、非物質文化遺産は「各民族に代々伝えられてきた、人々の生活に密接に関連する伝統文化の表現形式である」とし、それに含まれる範囲を口頭伝承、伝統芸術、風俗活動・儀礼・年中行事、自然界と宇宙に関する民間伝統知識や実践、伝統的な手工芸などとした⁴。これは、漢族だけではなく55の少数民族すべての有形、無形の文化遺産を保護することを世界的な条約によって承認するものであり、そこで中国政府によって申請された文化遺産は、国内的には各民族の文化遺産であるが、対外的には中国という国家、すなわち中国国民＝中華民族の文化遺産ということになる。これは多民族国家中国において、国民＝中華民族という概念を各民族の上位概念として用い、国家の統合を図ろうとする中国政府の民族政策と合致するものといえる。

そこで中国政府は、少数民族のさまざまな無形文化遺産を国家級、省級、市級、県級、郷級など各級の文化遺産に指定し、世界遺産登録をめざした。チャン族の文化も2006年に「羌笛の演奏と製作技術」や「瓦爾俄足節」が国家級の非物質文化遺産名録に入れられ、続いて「多声部民歌」や「羊皮

2 人民共和国成立前のチャン族研究については、松岡正子『チャン族と四川チベット族』第一章に詳しい。

3 櫻井龍彦他「座談：開発と文化遺産」（『中国21』vol.34 東方書店2011.3 3-28）参照。

4 加治宏基「中国のユネスコ世界遺産政策 - 文化外交にみる「和譜」のインパクト」（『中国21』vol.29 風媒社2008 183-202）参照。

鼓舞]、「羌族刺繡」も登録された。大地震後は「羌年」(チャン族伝統の新年)もユネスコの緊急保護非物質文化遺産に認定された。羌年については、1950年代から20余年の活動停止や社会の変化をうけてその意味がかなりかわっており、活動の復活は限定的であるが、災害復興という政治的要因がこの認定に大きく働いたことは疑いがない。

チャン族研究は、中央政府などから多額の援助をうけた結果、当時、最も研究資金を得やすい研究対象となり、一躍、全国区の研究テーマとなって全国各大学や機関などで複数の研究プロジェクトが立ち上げられた。これまでほとんどチャン族研究に関わっていなかった研究者や若手研究者がチャン族研究に参加し、玉石混濁とはいえ質量ともに大きな発展があった。地震後5年たった今日、以下のような成果が公にされている。

大地震発生後、中央政府はすばやく人民解放軍や温家宝などのトップを派遣して対応し、地震後の救済復旧に努めた。さらに復興支援策を「中国復興模式」⁵となづけて、その速さや質の高さ、規模の大きさを国内外に喧伝した。「中国復興模式」において強調されているのは、人民解放軍の献身的な救助や各省による「対口支援」である。このうち中央政府や人民解放軍についてまとめたのが、『北川“5.12”大地震抗震救災紀実』(上、下冊、中共党史出版社 2009年8月)である。また各省による「対口支援」は、インフラ整備においてすばらしい成果をあげており、被災地の県別の記録集が、四川省“5.12”地震災後恢復重建委員会弁公室・中共四川省委宣传部等主編の『山東・北川 再造新北川』(四川人民出版社2011)等「感恩」叢書17冊として刊行された。書名の冒頭に記された山東・北川とは、山東が対口支援をした省名で、北川が支援された被災県である。

このほか被災地の現状と救済を伝える写真集や記録集、およびDVDも次々と刊行された。また地震発生を科学的に説明するために汶川地震災害地図集編纂委員会・国家測繪局等編『汶川地震災害地図集』(成都地図出版社2008)など最新の技術を使った被災地の地図が出版され、多くの関連論文が提出されて地震のメカニズムや防災減災等について論じられている。

国内外の共同研究も活発に行われた。このうち学術的成果として重要な

5 松岡正子「中国復興模式」(国立民族学博物館『季刊民族学』138号95-99)参照。

もの一つに、李紹明・松岡正子編『四川省のチャン族－汶川大地震をのりこえて[1940－2009]』⁶がある。これは、人民共和国内立後の約60年間のチャン族を、約600枚の記録写真（複数の研究者が異なる時、異なる場所で撮影したもの）と日・中・英の3か国語による解説によって記した民族誌である。1956年から中国科学院民族研究所四川少数民族社会歴史調査組がチャン族地区で実施した民族識別調査時に写された約200葉の写真もある。1950、60年代という政治運動の激しい時期の一民族の写真がこれほどまとまって公開されるのは初めてであり、貴重である。またすべての写真に撮影者、時期、地域（村落単位まで）が明記されており、いつごろ、どこで、どのような変化が起きているのか推測すること可能で、文化人類学的には極めて貴重な資料になっている。

小稿では、紙幅の関係からまず主要な成果のうち今後、チャン族研究に影響を与えらると思われる羌族文化数字博物館と、积比文化研究について述べる。

2. 羌族文化数字博物館

羌族文化数字博物館は、中国非物質文化遺産ホームページの中国非物質文化遺産数字博物館上に作成されている。写真が多用され、説明文は極力抑えてあり、みやすい形に工夫されていて、参考文献も付されている。一つの少数民族だけをとりあげた専門の数字博物館としては初めてであり、ネット上に掲載されたことで、今後、国内外の多くの人が目にするようになるだろう。しかも中央政府文化部の責任作成であるから、国家によって公認されたチャン族文化ということになる。これからチャン族を知ろうとする者、チャン族文化研究を始めようとする者は、まずこれを見ることになり、多くの者がその内容の是非を疑うことなく、ここからスタートすることになる⁷。なんといっても文化部公認であるから、多くの研究者が討論し、これまでの研究成果も十分ふまえた結果に違いないと考えるのが一

6 塚田誠之「写真は時代を映し出した－李・松岡『四川省のチャン族－汶川大地震をのりこえて[1950－2009]』」（『中国21』vol34 2011.3 323-330）に詳細な書評がある。

7 被災後の重要な成果の一つといえる黄承偉等『汶川地震災後貧困損重建と本土文化保護研究』（社会科学文献出版社2010）においても第8章「非物質文化遺産保護と旅遊開発」（112-114）で文化風物の一部が引用されるなど、複数の章で羌族文化数字博物館の記述がそのまま引用されている。

般的である。しかし、後述のように、内容的には必ずしも学術的であるとは言い難い部分が少なくない。本節では、羌族文化数字博物館の構成に従って、問題点を指摘していく。

チャン族文化の保護については、非物質文化遺産を管轄する中央政府文化部長官が、チャン族文化生態保護区を定め、文化传承人や伝習活動所を認定し、有形無形の文化遺産を特定したうえで被災区の文化生態保護を進めた。また中国非物質文化遺産保護中心は、汶川大地震直後の6月24日に四川で非物質文化遺産の専門家座談会を開催し、羌族文化緊急救済方案を検討したうえで、羌族文化数字博物館を中国非物質文化遺産網の中国非物質文化遺産数字博物館上に作成することを決定した。開通式は同年7月23日に行われ、中国非物質文化遺産の機構を構成する中国文化部、文化部社会文化司（非物質文化遺産司）、中国藝術研究院、中国非物質文化遺産保護中心の代表者、在京のチャン族研究者等が出席した。

羌族文化数字博物館は、中国非物質文化遺産数字博物館の冒頭ページで特別テーマのトップにあげられている。これは、中国政府が被災後の救済と保護に力をいれていること、特に民族集団とその文化が存亡の危機に瀕している時に少数民族の文化を極めて重視していることを内外に強力にアピールするものである。またこのような少数民族文化の重視は、国内的には中央政府の民族政策の一環としての意味を有することを窺わせる。

羌族文化数字博物館は、広く国内外の一般にむけて開放されている。写真が多用され、説明部分は最小限となっていて、楽しく見ることができる。また項目によっては参考文献が付されており、より詳細な情報を求める閲覧者にも対応している。構成は、羌族概覧、美好家園、文化風物、羌之印象、遺産保護、搶救重建（緊急救済と復興）、学術研究、新聞動態（報道状況）の8部からなる。目次の名称には、遺産保護や学術研究などもあって、一見、学術的な感じをあたえる。しかし2～4部の美好家園、文化風物、羌之印象などの名称は、分類の意図がわかりにくく、内容を曖昧にさせる。四川の某チャン族研究者によれば、羌族文化数字博物館はあくまでも政治主導のものであり、説明には不十分な部分や疑問が残る部分があり、研究者による編集ではないという。以下では、各章の内容からその問題点を考えていく。

第一部「羌族概覽」は、「悠久歴史」と「今日羌族」にわかれる。「悠久歴史」は、さらに「遠古羌人」、「逐鹿中原」、「古羌人何処去」、「古羌聖賢」の4つからなり、古代羌の歴史を述べる。ここで描かれた古代羌は、羌族文化数字博物館のなかで編集側の意図が最も明確に表されている。すなわち「遠古羌人」では、1970年代以来、岷江上流のチャン族地区で発見された文物をとりあげて黄河文明の仰紹文化などとの関連性をのべ、現在のチャン族の祖先がそれらの文化をもつ集団であるとする。現在のチャン族居住地には双耳罐などの新石器時代の文物や、秦漢以前と推定される石棺葬群、5000年前と推定される营盘山遺跡（2000年発掘開始）が発見されており、それらを担った集団がチャン族の先民、すなわち古代羌であるとする⁸。しかし現チャン族には、岷江に移住した時に先民の戈基人と戦って勝利したとする史詩「羌戈大戦」が語られており、これらの文物についてはすでに農業を開始していた「戈基人」との関連をまず十分に論じたうえで、現チャン族との関連が問われるべきであろう。

また「逐鹿中原」、「古羌人何処去」では、古羌は伝説の黄帝に対抗した炎帝神農の姜姓の羌人で、中原に入って華夏族と融合したとする。さらに「古羌聖賢」では、前述をふまえ、『左伝』『周語』などの記述を引いて共工、禹が姜姓集団であること、『史記』などの「大禹生西羌」の記述に加えて、チャン族地区には多くの禹の遺跡があって、現在のチャン族は大禹を崇拝している（李紹明「羌人与大禹」）ことから、大禹は羌人であり、羌は華夏族の一支であるとする。また参考文献の論文「汶川大地震：禹羌文化之殤」でも、北川羌族自治州における甚大な被害をとりあげ、大禹記念館や禹穴など大禹に関する伝承や遺跡、北川羌族民俗博物館の物質文化が多大な被害をうけたことで禹羌文化の壊滅の危機であることを記し、その復興を訴える⁹。

8 林向（2004）「“禹興於西羌”補証－從考古發見看夏蜀關係」

9 松岡「汶川地震後におけるチャン文化の復興と禹羌文化の創出」（瀬川昌久編『近現代中国における民族認識の人類学』昭和堂2012年134-164）参照。北川チャン族は「漢化」の深い集団として知られており、すでに1980年代にチャン語をはじめとした多くの特徴的な羌族文化を失っていた。そのため北川県は、岷江の羌文化をモデルに民族文化の収集と復興に努め、地震後の復興では、幹線沿いの建物を中心に外観を石積みのチャン族伝統家屋型にして街並みを羌化した。なおかつてチャン族自治県としては茂汶羌族自治県（1958-1986）があり、阿壩藏族自治州が1987年に阿壩藏族羌族自治州になったことで、再び茂県と汶川県に分かれた。

さらに、漢・チベット語族のチベット・ビルマ語群に属するイ、リス、ナシ、ハニ、ラフ、アチャン、パー、チノー、トチャ、プミなどの西南の諸民族は、みな祖先が西北から移住してきた古羌系の民族であるとする伝説をもっており、古羌を華夏族の一支とすることで、西南の多くの民族も同様に華夏族の一支ということになる。これは、56の民族集団の上位集団として中華民族=華夏族=国民を想定して国民国家を形成しようとする中国の民族政策に沿うものといえる。

ただし西羌、古羌の「羌」には、集団の意味だけではなく、非中華、中華周縁の地域など広義の意味があることもすでに指摘されている¹⁰。とすれば、以上のように、大禹は古羌人(=西羌人)であり、古羌人は現羌人の祖であるから、大禹はチャン族(現羌人)の祖であり、チャン族は華夏族の重要な一支系である、また古羌系とされる西南の諸民族も華夏族の重要な一支であるとする説の展開は、中央政府文化部が公認するチャン族研究では最も強調される点の一つであるが、現段階ではなお十分な検討が必要であろう。換言すれば、このような説の展開は、政治性が極めて濃厚であり、羌族文化数字博物館の特徴であるとともに、学術的には大きな問題点であるといえる。

一方、現代のチャン族についてのべた「今日羌族」は、「人口と分布」(2000年)、「環境(自然地理)と資源」、「文化と遺産」の3つにわかれ、理県桃坪寨や茂県黒虎寨、舞蹈「薩朗」の写真と簡単な概説が付されている。しかし「文化と遺産」では、従来および今日の有形、無形の文化遺産が時間の経過による変化を考慮せずに並べられ、すでにほとんど行われていないものがあたかも現存するかのよう記されていて、問題である。

第二部「美好家園」は、「雲中羌寨」(碉楼、碉楼民居、石砌房、黒虎寨、桃坪寨)、「絢麗霓裳」(綺服雲履、美艷羌繡)、「古老婚俗」(訂婚三儀、婚礼三儀)、「喪葬礼俗」(土葬の録画が付されている)、「宗教信仰」(多神崇拜、宗教祭祀-糌粑)、「民風習俗」(羌族禁忌)の6つに分かれ、衣住、冠婚葬祭、宗教、禁忌を写真と概説で記す。住は主に理県桃坪寨と茂県黒虎寨。衣は、明確な地域差があるにもかかわらず、説明文には黒虎の女性の頭布の違いにふれたのみで統一的に記されており、写真には地名がない。羌繡

10 王明珂『美在漢藏之間-一個華夏邊縁的歴史人類学研究』(聯經2003年)

もチャン族自身がみれば一目で村の特徴が明確であるにもかかわらず、同様の統一的記述である。

第三部「文化風物」は、「節日」（羌年、瓦爾餓足節、蘇布士）、「舞踏」（克西格拉、薩朗、羊皮鼓舞）、「音楽」（口弦、羌笛演奏及政策技芸、羌族多声部合唱）、「織繡」（文物遺存）の4部からなる。まず前文で、現在のチャン族が、5000年前に中国北部および西北部にいた狩猟民族氏羌部族の末裔で最古の民族であり、中国の半数以上の民族集団が羌系であることを述べ、多くの旧来の習俗を保持しているとする。ここで強調されるのも華夏の民としてのチャン族という位置けである。しかしとりあげられた年中行事は、多くが文化大革命などの政治運動を経て数十年間集団単位では行われなくなっており、復活は1980年代以降で、主に家庭単位である。集団で組織された祭りが行われたのは、政府による支援、特に経済的支援をうけた場合である。

例えば羌年（チャン族独自の新年）は、本来、収穫を祝う祭山会で、5、8、10月など異なる日時で行われていた。現在の10月1日に定まったのは、1987年に阿壩蔵族自治州が阿壩蔵族羌族自治州にかわり、1988年に州政府が条例でこの日を州の祭日に定めてからである。写真に掲載された羌年は、政府の支援をうけて再現された大規模な形で、老シビを中心に従来の再現が図られたが、政府の指導がかなり入り、娯楽の要素も加わった。しかし政府の支援がない年はこのような大規模な羌年は行われていない。経費が調達できないことや、かつて祭りを主催してきたシビを中心とした村の組織力が弱っているからである¹¹。蘇布士（祭山会）も、羌年と同様の状況である。

年中行事などが一時的な中断という形をとらざるをえなかったのに対して、舞踏（克西格拉、薩朗、羊皮鼓舞）、音楽（口弦、羌笛演奏及政策技芸、羌族多声部合唱）は、個人の身体に技術として伝えられており、娯楽的な要素を強くもっていることもあって、様々な場面で人心を表出するものと

11 理県龍溪郷阿爾村では、2009年に北京文化遺産保護中心が来村して「阿爾樸案」を書いて阿爾寨など4つの寨に経済的支援を行ったために、寨単位の集団型羌年が復活した。しかしその年以外には、経費、組織等の面で集団型を行う力が地域にはなくなっていた。各家あるいはシビを中心とした村人の有志で行われる程度で、儀式も簡略化したという（松岡「汶川地震後におけるチャン文化の復興と禹羌文化の創出」）。

して行われてきた。なかでも女性の手仕事である機織や刺繍は、高山地区のチャン族を中心に現在も母から娘へと伝えられており、被災後は女性の経済的來源として政府の支援と指導を受けている。「舞踏」以下の部分の写真や図に地域名が記されていないのが惜まれる。

第四部「搶救重建」は、「家園損毀」、「遺産危機」、「恢復重建」の3つからなる。まず「家園損毀」では、被災した人々の暮らしや、壊滅状態となった汶川県の蘿卜寨、倒壊した汶川縣姜維城、理県桃坪寨や茂県黒虎寨の碉楼の被災状況など物質文化遺産の被害の写真が掲載されている。「遺産危機」では、茂県羌族博物館や北川羌族民俗博物館、汶川縣文物管理所等の文物、年画で有名な綿竹の被害状況が写真で記されている。「恢復重建」は、胡綿濤総書記や温家宝総理など党と国家の指導者が被災地を慰問する姿、国際社会の援助を特集する。また全国地震災区非物質文化遺産搶救済保護専門家座談会も掲載されている。

以上、羌族数字博物館には、少なくとも2つの特徴が指摘できる。第一に、中華民族におけるチャン族の位置づけにみられる濃厚な政治性である。文化部は、現チャン族は古羌を祖としており、古羌は西羌であり、大禹（華夏族）は西羌であるから、現チャン族は華夏族の一支である。また現存の古羌系とされる西南諸民族も同様に華夏族の一支であるとする説を展開する。すなわち現存の少数民族のうちのチャン族および古羌系集団を華夏族として、56の民族集団の上位集団として中華民族＝華夏族＝国民を想定し、彼らに各民族としてのアイデンティティの上位概念に中国国民としてのアイデンティティを意識させ、国民として国民国家を形成することを認識させようとしている。

いま一つは、チャン族の有形無形の文化遺産を、地域的差異や時間的差異を考慮することなく、ほとんど統一的に記し、現在も古来の文化がそのまま維持されているかの如く紹介していることである。よって学術的資料としてはそのまま引用することができないものが少なくない。総じていえば、中央政府による政治性の強い、民族および民族文化の紹介といえる。

3. 积比文化の研究

积比（チャン族の宗教職能者、以下、シピと記す）およびシピが行う儀式や経典等を含む积比文化は、文化大革命期に迷信として否定されたため、各種の儀式は実施されず、シピ自身への弾圧や法器などの焼却が行われた。その結果、文化大革命が終了した1980年代初期には、多くのものが失われたうえに、シピの高齢化がすすみ、後継者はほとんどいないという状況であった。なによりも10年余の否定と断絶は、シピとその文化に対する尊敬とそれを核とした伝来の社会秩序を弱め、1980年代以降、シピ文化を復旧する力が多くの村落から失われてしまった。1988年に阿壩藏族羌族自治州政府が旧暦10月1日を羌年として前後数日を州制定の祝日とし、羌年を祝うよう奨励したが、1940年代頃までは村落ごとに行われていた地域でも個別の活動にとどまり、行わない地域もあった。2000年代になって中央政府の文化政策が伝統文化の保護に転換した時、シピがなお生存し、シピ文化が比較的維持されていた龍溪郷の阿爾村や休溪村などの地域で復活された「羌年」は、シピ主催という形ではあったが、政府がプログラムを決定し、経費を支援した政府主導の新たな羌年であった。そのため政府の経済的支援がなくなってからは、村落全体での羌年は組織的には行われず、シピを中心とした小規模の羌年になっている（2012年筆者聞き取りによる）。

このようなシピと积比文化の現況を考えると、かつて1993年に刊行された銭安靖編「羌族卷」『中国原資宗教資料叢編』（上海人民出版社）は、1940年代～1990年代初期にかけての胡鑑民（1941）「羌族之信仰興習為」（辺疆研究論叢）や葛維漢、1980年代の李紹明、銭安靖、趙曦ら代表的なチャン族研究者の論文、報告の資料が編集されており、また40年代からの貴重な記録写真も掲載されていて、きわめて重要である。

しかしシピ文化の核心である経文については、文字を持たないチャン族はすべてを口頭で伝承しており、既存の幾つかの論文で中国語の抄訳が掲載されているのみで、全容が記されることはなかった。そのためチャン族のシピの経文およびその精神世界が国内外に知られることはほとんどなかった。20世紀初めのイギリス人宣教師の陶然士（Rev.T.T.Torrance）、1930年代のアメリカ人宣教師の葛維漢（David Crockett Graham）、1940年

代の胡鑑民などは早期にチャン族地区に入って重要な報告を残しているが、シピの経文についてはわずかの記録しかない。また、1950年代生まれの趙曦も、チャン族居住区の汶川県にある阿壩師範高等専科学校に勤務し、1980年代から精力的にチャン族居住区においてフィールドワークを行い、シピについて複数の論文をだしているが、経文そのものの記録はしていない。なお彼の『神聖と親和－中国羌族积比文化調査研究』（民族出版社2010.9）には、1980年代の貴重なシピの活動記録が収められていて重要である。

しかし近年、1980年代生まれの若手研究者である阮宝梯は個別のシピへの聞き取り調査と経文を徹底して記録しており、阮宝梯編著『羌族积比口述史』（中国少数民族非物質文化遺産研究系列 民族出版社 2011.3）、王治升説唱、阮宝梯・徐亜娟採録翻訳『羌族积比唱経』（民族出版社 2011.6）は、質の高い調査記録となっている。これらの書では、シピの経文が大同少異の傾向があるとはいえ、各シピの経文が極めて個人的かつ閉鎖的に伝承され、各人の個性によって語りが異なることを十分踏まえており、いつ、どんな場面で、だれによって唱えられた経文であるかが明記されている。

さらに、四川省少数民族古籍整理弁公室主編『羌族积比経典』上下巻（四川民族出版社 2008.12）は、5.12後に刊行された积比研究の中で最も規模が大きく、最も重要である。これは、無文字社会で口頭によって伝承されてきたチャン族のシピの全経典を、初めて文字化しようとした画期的な試みである。文化大革命期における弾圧や改革開放以降の価値観の変化によってシピ文化の実質的な価値が薄れ、父子伝承を基本とした後継者がほとんど途絶え、一方でシピ自身の高齢化や逝去が進んだ。シピ文化が途絶えるのも時間の問題となってきた近年、最も必要な作業であったといえる。

『羌族积比経典』は、序言（谷運竜）によれば、国家民族事務委員会によって「十五」「十一五」全国少数民族古籍重点出版項目に指定され、四川省民族事務委員会および同委員会古籍弁の指導のもと、阿壩師範高等専科学校の蔵羌民族研究所（少数民族文化芸術研究所）が「羌族积比経典研究」課題組を組織して作業を担当し、およそ6年の歳月をかけて2008年12月に完成し、2009年に刊行された。本書では、チャン族が居住する阿壩蔵

族羌族自治州の汶川県、茂県、理県のシピ50名弱を実験室に招いて経文を唱ってもらい、それを録音して国際音標文字で記録するという方法が採用された。チャン語には北部と南部の2大方言の違いがあるうえに、今回収集されたシピはすべて南部方言であるとはいえ、さらに細かい土語の違いがあり、記録は大変な作業であったに違いない。

さらに本書は、「三対照一付録」形式で記述されている。これは、一つの経文に対して三種類の記載法を採用したもので、第一行に国際音標文字によるチャン語の口語経文の原資料、第二行に漢語による逐語直訳、第三行に漢語による意識があり、各経文の最後には中国語による全体の通訳がつけられている。500部あると伝えられていた經典は、主要なシピのうちすでに11名が亡くなっており、タブーなどの関係から記録できなかったものや、一部は名前のみであることなどがわかって、収録されたものは362部となり、およそ300万字が記された。これに費やされたであろう労力と時間に対しては、担当した方々に深い敬意を表したい。

対象としたシピについては、『羌族积比經典』上巻の冒頭に、5枚の写真と編纂委員会名簿の次に「羌族主要积比名单」があり、主要なシピ49名をあげて、その名前や性別（すべて男性）、生年月日、伝承方式（祖伝か師徒か）、居住地が掲載されている。年代別には1900年から1920年生まれ（90歳以上）が13名（うち死亡11）、1930年生まれ（80歳代）が15名（うち死亡1）、1940年生まれ（70歳代）が7名（うち死亡1）、1950年生まれ（60歳代）が12名（うち死亡1）、1960年生まれ（50歳代）2名である。シピ達には90歳から53歳までの年齢幅があるが、生存するなかで文革以前のシピ文化を知るのは1940年生まれまでの約20名にすぎない。また40歳代以下の後継者はほとんど望めないという。2005年に主に汶川県と茂県でシピを取材した阮宝梯によれば、経文を語ることができるのは両県ですすでに10数名にすぎないという。またシピの居住地をみると、汶川県24名、理県14名、茂県11名で南部方言地区に集中しており、各県でも山間の交通が不便で、近年までかなり閉鎖的な地域であったためにシピ文化が比較的維持されているところであることがわかる。汶川県では、綿虎鎮羌峰村、雁門郷の羅卜村や通山村、龍溪郷の阿爾村や夕格村、理県では、蒲溪郷の蒲溪村や休溪村、桃坪村、薛城鎮、茂県では永和郷納普村、黒虎郷黒虎村な

どである。北部方言地区からは一人のシピも記されていない(後述)。

本書の構成については、各地のシピが語る経文は内容が複雑で重複し、広い分野に及んでいて、それぞれの体系が同じではないことなどから、内容をもとに大きく次の22部門に分けたとする。史詩、創世記、敬神、解穢、祭祀還願、婚姻、喪葬、驅害、符呪、禁忌、法具、驅邪治病保太平、哲学倫理、戦争、天文暦算占卜、科技工芸、建築、農牧、祝福詞、郷規民約、积比戯、医薬などである。これらの名称だけからも、シピの経文が信仰や冠婚葬祭のみならず、暦や生活全般、生業、社会秩序などチャン族の百科全書ともいべき内容を含んでいることがわかる。

しかし本書の最大の問題は、この構成のもとでの記録の仕方にある。上述のように、各地のシピが語る経文は体系が同様ではなく、重複があって統一が難しい。ところで記録の基本は、いつ、どこで、誰が、どのように語ったのか、誰がどのように採取したのかということをも明記することにある。本書では、どこでのみかはっきりしているだけで、その他の必要条件が全く記されていない。シピによって異なる口述があったとすれば、それがどんなに膨大になったとしてもその言葉のままを記し、上記の基本条件をつけたうえで内容によって分類する必要があったのではないか。

本書では、チャン文化における地域差、個人差ということが全く考慮されていない。各人の異なる表現をなんとか統一して記載しようとしたことは、文化人類学や社会学における学術的という観点からは大きな損失である。本書によって、シピ経文の大意はわかるが、論文の個別の引用には不適である。またシピの経文は、どのような場面で唱えられるのかが重要であるが、それについての記述もない。本書の形式は、1960～70年代の民間文学研究における採録、修整、編集という文学的研究を思わせるものであり、文化人類学や社会学のそれではない。今後、各シピが語った原資料をシピごとにそのまま公表していただければ、大きな学術的な貢献となると思われる。

つぎに、北部方言地区からは一人のシピも出ていないという点についてのべたい。シピについては、一般に、チャン族の宗教職能者であるが、それのみを行う聖職者ではなく、ふだんは農民であり、必要な時に儀式や占いをを行い、特別な報酬はないと説明される。しかしシピの経文の内容から

明らかなように、チャン族社会におけるリーダー的存在であったことは間違いない。実は、中華人民共和国成立後、選ばれて共産党のもとで学び、地方政府の幹部になったり村落の指導的立場になった者の中には、シピの家系の出身であったり、後にシピとして名を連ねている者も少なくない。

また2012年11月、筆者が理県龍溪郷直台村の移住地を訪れた時、30数戸の村落の中でおよそ60歳以上の20数名の老人たちが集団で活動しており（以下、これを長老会とよぶ）、朝食後、広場に集合してトランプやおしゃべりをして過ごし、昼食後も同様であった。彼らは、移住前まではみなで早朝から山の草地でヤギを放牧し、夕方帰宅するという生活をおくっていた。移住先の現在の土地では、ヤギもブタも飼育することが許されておらず、仕事がなくなった。長老会にはシピを名乗る老人も4人ほどいた。4人はそれぞれが法具をもっていたものの、長老会が組織した羌年では、最も有能なシピが経文を唱え、他の3人が羊鼓を打ったり供物を作ったりした。かつては老人の多くがシピの経文や儀式に関わる知識をもっており、長老会の主導で会主（祭祀の事務方責任者）が各戸から経費を集め、業務を分担して羌年など村全体で行う活動が行われていたようである。とすれば、シピという呼称は、儀式や生活に関する多くの知識をもつ老人達の総称に相当したとも考えられる。

ところが白石崇拜などチャン族の生活や信仰の原形をよく残すといわれる北部方言地区からは、今回の経文の録音のために一人のシピも呼ばれていない。チャン族の北部方言を用いる者は、現在、その約70%が茂県の北部に隣接する黒水県のチベット族であり、隣接する赤不蘇区のチャン族と通婚している。本来チャン族であった彼らが1950年代の民族識別の時にチベット族となったのは、中華人民共和国成立前まで彼らを支配していた土司がギャロン・チベット族であったため、複雑なチベット問題が絡んでいたといわれている。

筆者は、1990年代から北部方言地区の赤不蘇区でフィールドを行っているが、南部方言地区でみられるシピのような存在をすでにほとんどみかけたことがなく、かねがね不思議に思っていた。また北部方言地区にはチャン族の移遷の歴史を物語る「羌戈大戦」等も伝えられておらず、祭山会は農曆5月で、かつて農曆10月1日の羌年は行われていなかった。1990年に

当地の赤不寨で行われた火葬の際には、風水先生（漢語でそう説明を受けた）がよばれて火葬場で经文を唱えた。風水先生はチベット仏教を信仰していたが、葬儀のやり方は赤不蘇区のチャン族伝来の方法であったし¹²、赤不蘇区のチャン族はチベット仏教を信仰してない。彼らの白石崇拜や転山会（祭山会）は、四川西南部の「蔵彝走廊」に居住するチベット族のそれに類似点が多く、それはチベット仏教伝来以前のボン教を反映するともいわれる¹³。赤不蘇区の風水先生は蔵彝走廊区のチベット族のシャーマンのあり様を思わせる。

換言すれば、北部方言地区と南部方言地区のチャン族は、岷江上流域にたどりついた後、かなり異なる歴史をたどってきたのではないかと推測される。南部方言地区では、すでに先住民「戈人」がいて、それを打ち破って彼らから農業など先進的な技術を学んだと伝える（史詩「羌戈大戦」）。実際、当該地区の汶県雁門郷羅卜寨や龍溪郷阿爾村には、黄河流域の様々な文明との関連を示す新石器時代以来の文物が発見されており、それは現在、巴蜀文化や長江文明との関連から研究されている¹⁴。

近年、現存のチャン族を甲骨文字に記された古羌の末裔とし、古羌は西羌であり、「禹興（生）西羌」（『史記』等）の記述から、禹はチャン族であり、華夏族系の重要な一部であるとする説明がよく語られている（羌族数字博物館等）。確かに『羌族积比經典』には、漢族の大禹治水伝説とほぼ同じ内容の「大禹頌」が収められており、汶川県と北川県には大禹に関わる史跡も残されている。しかしそれは大禹がチャン族であるというよりは、むしろ南部方言地区ではおそくとも漢代以前の早期にチャン族が華夏族（大禹を祖先とする集団、あるいは「戈人」）と接触してその文化を取り入れたとみるほうが自然ではないだろうか。『羌族积比經典』では、序言の冒頭で、上述と同様の理由で大禹はチャン族であり、チャン族は華夏族の重要な一部であることを強調する。また冒頭の写真5枚については、チャン族の特徴を表すのが碉楼と村落周辺の景観の2枚のみで、残り3枚を「石

12 松岡正子「チャン族の葬式」（『季刊民族学』54号1990年112-122）参照。

13 何耀華「川西南藏族的信仰民俗」（『中国民俗研究通信』8号6-13）、松岡正子「チャン族と四川チベット族」（ゆまに書房2000年242-246）参照。

14 江章華「岷江上遊新石器時代遺存新發現的几点思考」（『四川文物』2004年第3期）等。

敢当」としているが、石敢当は明らかに漢族の文化で、従来は漢化の象徴とされてきたものである。なぜ漢化を象徴する石敢当が、ここに掲載されているのか、筆者は大きな疑問を感じる。これもチャン族＝華夏族を強調するものなのだろうか。

以上によれば、『羌族积比經典』は、チャン族の南部方言地区のシビの経文の記録であるといえ、北部方言地区のシャーマンについてはどのような実態なのか、どう位置づけられるのか、ふれられていない。

このほか編者によって『羌族积比經典』の姉妹編として位置づけられる重要な刊行物に、阿壩師範高等専科学校少数民族文化藝術研究所編『羌族积比図経』上下巻（四川出版集団・四川民族出版社 2010.3）がある。本書は、前言によれば、チャン族自身はこれを『摩薩（mosua）』あるいは『刷勒日』ともよび、文字をもたないチャン族が彩色画によって描いた經典である。『羌族积比經典』編集集中に、茂県のシビの手元に保存されていたのが発見された。体裁は、綴れ織り式で、全長4.2m（全開時）、表紙と裏表紙があり、両面に82幅（枚）の彩色画が描かれ、一幅は横10cm、高さ16.5cm、綿布の上に貼られた紙上に描かれている。発見時、図経全体はノロ（生獅子）の皮で包まれていた。内容は、チャン族の婚姻喪葬、家屋の建築、農業狩猟、運搬渡航、祭祀還願などチャン族の生産生活全体に及ぶ。

後記及び前言には、本書の発見までの過程が詳細に記されていて興味深い。本書が最初に発見されたのは1930年代末であり、1990年代に茂県赤不蘇でこれとは別の版本がみつかった。『刷勒日』とよばれ、その解釈が『羌族积比（許）文化研究』（内部刊行）に報告され、前8頁に数十幅の黑白画が附されている。2003年、阿壩師範少数民族文化芸術研究所が『羌族积比經典』編集作業のために某シビを採訪した時、シビが経文を記憶するのを助けるための図画書が民間にあることを聞いた。そして茂県永和郷の龍国志老シビがかつて彩色画書を持っていたが、大躍進の時に売り払ってしまい、そのなかの一冊が茂県溝口郷二里寨の老シビ肖永慶の手元にあるものの、破損がひどいことがわかった。2009年5月、茂県永和郷永寧村一組の何清雲老シビが完全版本一揃いを持っており、彼がほぼ全容を解釈できることがわかった。

何シビによれば、それは『摩薩』とよばれ、すでに16代伝えられている。

綴れ織り型で両面に彩色画が描かれ、上下部の2巻に分かれる。上部は綿布の上に貼られた紙上に、チャン族の宗教祭祀や卜卦、婚姻、喪葬、生産生活等の場面が描かれている。下部は、綿布の上に直接描かれており、主に天文暦法に関する内容である。何シピの『摩薩』は、もともと彼の師である張世清シピが所有していた。しかし文革時に張シピは家庭成分(出身)が悪いという理由で常に造反派から批判され、『摩薩』も破棄されそうになったため、何は真夜中に危険を冒して師を訪ね保管することになった。しかしその後、大隊の中でシピなど封建迷信への批判がますます激しくなったため、『摩薩』は家屋奥の梁上から大樹の根元、さらに自留地の地中へと3度も場所を変えて隠さなければならなかった。何シピは、阿壩師範の研究者が訪問した時、協力的ではなかった。それは、文革時に激しい弾圧を受けたからであった。訪問の意味を理解してからは、弟子の楊天榮とともに約20日間を費やして解釈してくれた、と記されている。

本書の成立時期については、本書の序(馬洪江)に千年前のチャン族の生活が描かれているとあるが、これは虚言であろう。何シピの伝える16代(約400年前)は、絵画の中の役人の様子が清代のそれと推測されることから(四川民族研究所李紹明の説)、妥当ではないかと思われる。

4. 小結

以上、小稿「汶川地震後のチャン族研究(1)」では、まず汶川地震後のチャン族研究について、2000年代以降の中国政府による非物質文化遺産保護政策とチャン族文化復興政策とを関連づけてその概要と意味を述べた。つぎに汶川地震後の成果のなかで文化人類学的視点から今後のチャン族研究に大きな影響を与えると思われる「羌族文化数字博物館」と「釈比文化の研究」をとりあげ、その概要と問題点を検討した。

「羌族文化数字博物館」は、チャン族の歴史や概要、有形、無形の文化遺産を多くのカラー写真と説明文で語っており、みやすく工夫されている。しかも政府文化部の作成の政府公認のチャン族文化の概説としてネットで公開されていることから内外の多くの人々が見ることになり、今後は一般人だけではなく、研究者もここからスタートする可能性が高いことが予想

される。

しかし少なくとも次の2つの問題が指摘できる。第一に、現チャン族をエスニックグループの上位概念である華夏族の一つと位置づけ、華夏族＝国民による国家形成という国家の民族政策に組み込もうとする方向が強く打ち出されていることである。すなわち現チャン族は古羌（＝西羌）の末裔であり、一方、華夏族の祖である大禹は西羌に生まれたとあることから西羌人であり、よってチャン族は華夏族の一であるという論の展開である。これは、学術的にはなお検討が必要であり、むしろ政治性の濃厚な論であるといえる。第二に、内容的には、有形無形の文化遺産は地域や実施時期などが明確にされておらず、地域差および時間的変化について全く考慮されていない。学術的記述という点からはかなり遠い。総じていえば、羌族文化数字博物館は、政府主導の、政治性の濃厚なチャン族およびチャン文化の紹介であるといえる。

「积比文化の研究」では、主に最大の成果である『羌族积比經典』についてとりあげた。無文字のチャン族にとって高齢化が進むシピ達の経文を可能な限り収録し、文字化することは緊急の課題である。この意味で国際音標文字と漢語、漢語の意識の3種で記録した本書の貢献は極めて大きい。しかし50名余のチャン族の経文を記録するにあたって、個人差や地域差を全く考慮せず、統一的な大要を記したこと、さらに記録時の基本である誰が、どのように、どんな場合にという要件を全く示さなかったことは、文化人類学的視点からは大きな損失である。引用資料としての価値がほとんど失われている。

また解説ではふれられていないが、対象とされたシピはすべて南部方言地区のシピであり、本書は南部方言地区のシピの経文の記録であるといえる。実は、シピ研究において、北部方言地区の信仰については、白石崇拜や祭山会（転山会）についてはのべられるが、シピ的存在はあまり言及されることがない。儀式や社会秩序、道德概念などについては、長老（威望のある年長者）が中心となってしきっているようにもみうけられる。或いはチベット仏教の影響を受けていると記されることもあり、両方言地区の違いについては、今後検討されなければならない課題である。

なお次稿「汶川地震後のチャン族研究（2）」では、被災後の成果のなか

でも顕著となった、質量ともに向上したフィールドワークやアンケート調査を基にした報告論文を取り上げる予定である。

参考文献

- 阿壩師範高等専科学校少数民族文化藝術研究所編 (2010)『羌族积比図経』上下巻
四川出版集団・四川民族出版社
- 王明珂 (2003)『漢藏之間—一個華夏邊縁的歴史人類学研究』聯經
- 加治宏基 (2008)「中国のユネスコ世界遺産政策—文化外交にみる「和諧」のインパクト」『中国21』vol.29 風媒社 183~202
- 何耀華 (1991)「川西南藏族的信仰民俗」(『中国民俗研究通信』8号6~13)
- 黄承偉等 (2010)『汶川地震災後貧困損重建与本土文化保護研究』社会科学文献出版社
- 江章華 (2004)「岷江上遊新石器時代遺存新發現の几点思考」『四川文物』2004年第3期
- 櫻井龍彦他「座談：開發と文化遺産」『中国21』vol.34 東方書店 2011年 3~28
- 四川省少数民族古籍整理办公室主編 (2008)『羌族积比經典』上下巻 四川民族出版社
- 錢安靖編 (1993)「羌族卷」『中国原資宗教資料叢編』上海人民出版社
- 中共北川羌族自治州委党史研究室・北川羌族自治州地方志办公室編 (2009)『北川“5.12”大地震抗震救災紀実』(上、下)冊 中共党史出版社
- 中共四川省委宣传部等主編 (2011)感恩叢書『山東・北川 再造新北川』等17冊 四川出版集団・四川人民出版社
- 塚田誠之 (2011)「写真は時代を映し出した—李・松岡『四川のチャン族—汶川大地震をのりこえて [1950-2009]』」『中国21』vol.34 323~330
- 松岡正子「チャン族の葬式」(1990)『季刊民族学』54号 112~122
- 松岡正子 (2000)『チャン族と四川チベット族』ゆまに書房 242~246
- 松岡正子 (2012)「中国復興模式」(国立民族学博物館『季刊民族学』138号 95~99)
- 松岡正子 (2012)「汶川地震後におけるチャン文化の復興と禹羌文化の創出」瀬川昌久編『近現代中国における民族認識の人類学』昭和堂 134~164
- 李紹明・松岡正子 (2010)『四川のチャン族—汶川大地震をのりこえて [1950

-2009]』風響社

林向 (2004) 「“禹興於西羌” 補証 - 從考古發現看夏禹蜀關係」『阿壩師範高等
專科学報』第二十一卷第三期